

<道の駅やいたエコハウス> プロポーザル建築設計者選定報告書

田園風景が広がる<道の駅やいた>計画地の一画に想定された、今回のプロポーザルにあたって以下の審査方針を想定した。

- 1 . 地域性について
計画敷地をどう読み込んだか。(自然環境を含めた地域性への提案)
- 2 . 省エネ性について(1)
省エネ性と居心地のよい住まいの関係
- 3 . 省エネ性について(2)
屋外環境と屋内環境の関係性
- 4 . 自然・再生可能エネルギーについて
パッシブな技術への試み
- 5 . 提案に対する実効性について

今回のプロポーザルには、14の計画案が提出された。

全体の印象としては、エコハウスだからか、盛りだくさん過ぎてまとまりがつかなかったのではないかと思われる。恵まれた環境の中で、その環境を生かして居心地のよい住まいをどう提案するかがこのプロポーザルの主たる目的であると思う。

もうひとつ気になったのは、エコハウスに対しての答えの多くが太陽光発電パネルの搭載だったことである。太陽熱をそのまま利用するパッシブソーラーなどの多様な技術の提案があるのではないかと期待していたのではあるが。

審査結果としては14案の中から6案を選定し、さらに6案の中から上位4案を選び今回のエコハウスプロポーザルの最優秀案を決定した。

選定した6案の講評を以下に記述します。

1. 大柿一級建築設計事務所（エントリーNo.3）

総体としては、うまく納まっている案ではある。エコハウスのモデルとして住居部と情報発信の場を分離することで、ここを訪れる人たちが住まいとしての場を体験できると同時に学習の場として機能しているのはこのコンペの主旨をよく理解されている。

住居部の構成も、タタミコーナーを設けることで主たる空間に広がりをもたせ、敷地北側にひろがる田園風景を生かしている。

一方、南側にはビオトープ・家庭菜園などを提案しているが要素が多すぎてまとまりに欠けているのではないか。

省エネ性の試みも要素が多すぎて提案すべき核があいまいになっている。

エントリーされた他の案にも空気の循環がうまくいくとの考えで吹き抜けが多用されているが、その効果が実証されているのであろうか。

2. 有限会社 ゆめみらい一級建築士事務所（エントリーNo.4）

自然・再生可能エネルギーの活用への提案は少々乱暴ではあるが、挑戦としてはなかなか面白い。棟にガラス屋根を設けて太陽熱を直接利用するスペースを蓄熱・放熱の役割をもたせ、暖房・お湯採りしようとしている。

実際に実証をしていかなければならないという課題はあるが、自然・再生可能エネルギーを全面的に重点をおいた興味深い提案であった。

しかし、正直なところ、住宅展示場ではないかとの印象をうける。このコンペの主旨である居心地のよいエコハウスといえるのであろうか。外との繋がりという点でもあまり配慮されていないのではないか。

3. 有限会社 池澤設計（エントリーNo.5）

地場産材を利用したオーソドックスにまとめられた案（住居部と学習場としての展示空間を分離した）ではあるが、エコハウスとしては太陽光発電のみでより積極的な提案がされていないのは残念。

配置計画でも南側にポチポチと植栽されているがその意図は不明。エコハウスとしては、建物だけではなく周辺環境を含めたものでなれと思う。北側の田園風景をうまく利用する提案がされなければと思う。特に植物の力は家作りには大きく影響するものである。

4. 株式会社 フケタ設計 (エントリーNo.8)

今回応募された案の中で、プロポーザルの審査方針である地域性/省エネ性/自然・再生可能エネルギー/実効性に対する答えとして、一番わかりやすく整理された提案がされている。平面計画としても風の通り(抜け)への配慮、矢板周辺の民家から学んだ土間空間の提案、地場産材の活用、自然再生エネルギーの活用、落葉樹を主体とした南側の雑木林の庭/北側の防風林を兼ねたカシの木などで計画されたこの家は、全開型の建具を使うことで北と南をつなげ、内部空間に広がりをもたらす(吹き抜けのあり方には少し疑問)居心地のいい家になるのではないかと思う。単純化した家の形も植栽と一体となり、この地に見合う風景を創り出しているといえるのではないか。

ひとつ注文をつけるとすれば、太陽光発電だけではなく太陽熱を利用したパッシブソーラーの試みを併用して提案してもらいたかった。

5. 株式会社 公和設計 (エントリーNo.13)

多くの要素を取り込み、その中でも展示施設としての機能を重視した提案である。今回のプロポーザルは展示場なのか、「すまい」なのか、判断は分かれるところではあるが、少なくとも「すまい」が重視されているほうが望ましいと考える。

コンペの主旨はあくまでも人がすむ「すまい」としてのエコハウスの提案である以上「すまい」を重視すべきだと思う。展示・体験・学習のためのスペースに重点がおかれすぎているのではないか。

この案もまた、多くの要素を盛り込もうとしてリアリティーに欠けているのではないかと思われる。

屋根の緑化は夏の受熱を減らすという点では有効ではあるが、木造の家では検討する要素が多くなる、例えば防水の処理とか植物への給水をどうするかは困難を伴う。

この案では2階に住居を設定しているが、その理由はどこにあるのだろうか。自然再生エネルギー活用についての提案がこの場合どうされているのかが読みにくい。

6. 株式会社 小堀建設（エントリーNo.14）

この建物を訪れる人に対してエコハウスの勉強ができるスペースとエコハウスの居心地のよい「すまい」を体感できるスペースを分離したまとまりのある案である。「すまい」のスペースは、土間空間の提案と北側の田園空間に面するタタミコーナーを設けることでリビングとオープンな台所・食堂が一体となって広々としたスペースが生まれているが、階段位置は検討すべきであろう。自然再生エネルギーの活用については充分検討されているとはいえないが、空気の流れ、太陽光の入り方は検討され計画に反映されている。

ただし、このコンペの敷地条件（形状）とこの計画案の敷地形状との食い違い（敷地条件の形状より広がっている）があるという点では残念ながら認めるといふわけにはいかない。

以上、6点の応募案の検討を審査員の中で検討した結果、エコハウスプロポーザルの最優秀案は「株式会社 フケタ設計」に、優秀案は「株式会社 小堀建設」と決定した。

また、優秀案とはならなかったが、自然・再生可能エネルギーへの意欲的な提案を評価して優秀案に準ずる案として「有限会社 ゆめみらい一級建築士事務所」と今回のエコハウスの趣旨をよく理解されて、総体としてうまく納まっていることを評価して「大柿一級建築設計事務所」を選んだ。

報告者

道の駅やいたエコハウス建築設計者選定審査委員会

委員長（N設計室代表） 永 田 昌 民